

子どもと地域のコーディネーション

——マクロな健全化を目指すソーシャルワーク——

船木幸弘（弘前学院大学講師）

はじめに

これまでの我が国の子ども政策は、多くの社会調査や分析をもとに興味深い知見の蓄積に基づいた対策を講じていながらも、少子化をはじめとする子ども問題の解決につながる状況に変化を与えているとは感じられない。それは、親が子どもの養育責任を果たしにくいことへの吟味が不十分で、そもそもの根本的な原因を取り除いていくことに欠けているからである。

田澤(1999)は、近代法が「家」を規定づけ、子どもの養育を地域という共同体の中から切り離したこと、「家」内部の親子は家庭内の母親による保育・教育の有為さを外来の家庭(ホーム)論から意識の中に取り込んだことが、親の養育責任に関する一般認識の形成に至った系譜であると指摘した。近代国家成立以降の100年で、子どもの養育責任が法制度的にも実際上も実父母に集中し、現代の子育てはかつて人類が経験してきた養育のあり方と比してかなりの無理があるとも付け加えている。これは、子どもたちの行動が特定の次代や状況によって急激に増加したり、突出したように見えたりする場合は、彼らが生きているこの社会(生活環境)が変容したことに他ならないということの意味している。つまり、これらのことが養育者の中心になってしまっている母親の育児不安や虐待にまで至らせる要因となり、その隔たりの中で育った子どもたちをそれぞれの問題に巻き込んでいるというのが現代社会の様相であるといえよう。

したがって、我が国の少子化はその当然の帰結(根本原因)としてのものであり、子どもの養育責任の父母への集中を取り除く(分散させる)工夫が即時的な有効性を高める子ども政策といえる。子どもの養育責任を父母から取り除く(分散させる)ためには、子育てをする親に何かを与えるという支援では不十分であり、地域(社会)として子どもの養育を担うという地域活動づくりが求められる。しかし、地域活動づくりには、担い手となる市民がそれなりに活動していくためのきっかけや、子どもたちの参加とそれらへの必要な支援にも配慮が必要である。それは、地域(社会)もそこに暮らす多くの人々も、子どもの養育に対しては機能不全に陥っているとの認識が妥当と思われるこ

とからもいえることである。地域活動づくりが機能していくような支援には、地域が子どもの養育に参加する責任意識の醸成というマクロなレベルへの変化(支援)が必要であり、その一つが子どもと地域をキーワードにするコーディネーションである。

小論では、子どもと地域をキーワードにするコーディネーションとはどのようなものを、社会福祉援助技術の立場から検討してみようと思う。

コーディネーションは一線を画する ソーシャルワークの一形態

地域社会(コミュニティ組織)にアプローチする場合の概念化には、「社会計画」「地域開発」「社会的活動」の3種類の立場があるといわれている。コミュニティの組織化は主にこれらいずれかの枠組みの中でなされるものと、ロスマンとトロプマン(1987)によって明らかにされたこの3種類の立場は、「実際の生活」の中では重なり合う部分が多い抽象的なモデルからなっている。したがって、ソーシャルワーク(社会福祉援助技術)ではそれらの枠組みを含めるが、地域社会へアプローチする具体的な技術をコミュニティワーク(地域援助技術)と呼んでいる。

コーディネーションは、古くからこのコミュニティワークにおいて重要性が指摘されていたが、近年、地域福祉の推進が叫ばれるようになり、ソーシャルワーカー(以下SW)のもつ機能としても重要視されるようになってきている。コーディネーションは、個人、時には小集団の複雑多岐にわたる生活ニーズと適切な社会資源を結びつける一つの形態としての技術である。特に、個人の生活問題を解決するために、二者あるいはそれ以上の個人、機関、施設、団体などの間に対等の関係をつくり、それぞれが最大限にその特性を発揮できるよう調整・調和を図ることをいう。

つまり、子どもと地域をキーワードにするコーディネーションは、地域コミュニティを健全化された子どもの居場所へと導く技術であり、子どもを健全な環境としての地域に導くとともに、それらに関わる健全な市民を育成する技術として期待されるものだといえる。筒井(1998)は、ソーシャルワーク(社会福祉援

助技術)における連絡・調整機能としてのコーディネーションが、単なる連絡活動や上意下達方式の調整方法とは一線を画しているとしたが、それは、子どもの育ちにとって最大限にその特性が発揮できるよう調整・調和を図った地域は健全であり、特性を発揮する子どもは健全になるといえることから妥当な指摘であるといえる。

機能としてのコーディネーション

コーディネーションは2つのレベルで機能するソーシャルワーク(社会福祉援助技術)といわれている。

一つは、要援助者の問題解決のために社会資源をニーズに応じて適切に調整する機能としますます重要になってきている在宅の障害児者・高齢者などの個別的なニーズや特定の施設の利用者などに対するミクロレベルの調整である。

しかし、子どもと地域をキーワードに加えると、子どもの心理的発達を効果的に補うことや学校、親などとの調整も加わり、ミクロレベルの調整を越え、子どもにより身近な外的環境での調整が生じてくる。それが、もう一つの地域社会における保健・福祉・医療・教育・住宅などの生活全般に関する公私機関・施設・団体など、その活動への支援を機能に加えたメゾ・エクソレベルの調整である。

このメゾ・エクソレベルの調整では、地域の特色を活かしていく。それは、子どもを対象とした地域活動が学校や家庭に替わる第三の空間としての子どもの居場所づくり活動であり、その居場所を提供する子どもの育ちを支える地域の人々のボランティア活動でもあり、この活動を担おうとする未来への人づくり活動でもあるからである。この働きかけが結果として与える影響が、現存する制度的、イデオロギー的パターンを変えていく(Bronfenbrenner, 1979)。つまり、地域(社会)がマクロレベルで変化していくのである。

これから子どもの養育を担う地域(社会)においては、子どもの養育を親とともに担うことがより広く社会化されることを意図したマクロレベルの変化をも生む機能としてコーディネーションへの期待は大きい。

コーディネーションの担い手とタイプ(型式)

コーディネーションは、すべてのSWに必要な機能とされるが、特にこの機能を専門の仕事としている担い手をコーディネーターという。よく知られているのが、ボランティアセンターなどにおけるボランティアコーディネーター(Volunteer coordinator、以下

VCo)である。

このコーディネーションの担い手であるVCoは、基本的にボランティア活動をする市民と関わる広い意味での対人援助をしている。その担い手のタイプ(型式)は、大きく分けて①活動主体型(ボランティア団体やNPO;活動先との調整、あるいは、組織としてのグループ形成など)、②仲介型(社会福祉協議会(以下、社協)などのボランティアセンター;活動希望者とボランティアニーズを募ってつなぐなど)、③受け入れ型(病院や福祉施設、公共施設など;活動希望者を受け入れ、利用者の生活の質を高めるなど)の3タイプ(型式)がある(山本, 2006)。特に②③型については、相談援助職であるSWとしての資質が必要だとされるが、筒井(2006)は、VCoの位置づけを従来のSWとは少し異なるタイプの対人援助の専門職であるとして、VCoの専門性認定のあり方の提示を試みている。VCoがコーディネーションを担う代表的な機関として、社協の活動に期待が寄せられている。

社会福祉協議会のコーディネーション

社会福祉の分野では、より小地域における市民のボランティア活動へのコーディネーションが重要視されるようになってきている。その背景の一つとして、1995年の阪神・淡路大震災など相次ぐ火災発生により、災害支援ボランティアの活動の広がりと共にVCoの存在とボランティアコーディネーションの重要性が認識されたことが大きい。近年の災害では、災害ボランティアセンターが各被災地に設置され、その母体は被災地の社協であり、全国各地から多くの社協職員が現地入りしてボランティアコーディネーションを担っている(志藤, 2006)。社協は、我が国におけるボランティア活動を支援する全国の全自治体にある機関として1989年以降急速に成長し、専任のVCoとボランティアセンターがコーディネーションを担う組織であり、全市町村の全国ネットワーク機能もある。

ボランティアコーディネーションの機能

コーディネーターを代表するVCoが担うボランティアコーディネーションの機能(図表1)は、主として次の5つである(巡, 1999)。また、この5つの機能は、「気づく」「ファシリテーション(援助促進する)」といった働きによって実践(制御)されている(船木, 2007)。つまり、VCoは適時、5つの機能それぞれの必要性に「気づく」こと、その機能を用いて対象(ボランティアニーズ)に「人として生きる」というボラ

ンティア活動をファシリテーションしているのである。ファシリテーションとは、個人やグループを対象に広い意味での“学習（学ぶこと）”を援助促進することで、人の「気づき」や成長（変化）に関わることである。したがって、VCoは、ファシリテーターであると考えても良い。

また、この5つの機能は、いずれも相互に有機的な結合が必要である。有機的に結合していく上で中核的なものが、つなぐ（需給調整機能）である。さまざまなニーズ（社会の課題）に対応するために、このつなぐこと（需給調整機能）で、他の機能を有機的に展開しさまざまな活動をファシリテーションしていく。

◎つなぐ（需給調整機能）

ボランティアの援助を求めるニーズとボランティアをつなぐ、援助を求めるニーズと様々な社会資源をつなぐ、ボランティアと様々な社会資源やプログラムをつなぐという、ボランティアニーズとボランティアを引き合わせる機能である。また、ボランティアの組織化、セルフヘルプ活動の支援、必要に応じて他機関や団体等とつながっていく（ネットワーキング）、さまざまな課題と社会をつなぐ（課題の社会化）機能でもある。

この機能を発揮するための前提は、援助を求める側の内なる想いとボランティア活動の希望者の想いを「引き出し」、「把握し」、「受け止める」といったことが求められる。

◎知らせる（情報提供機能）

ボランティアを求めるニーズを広く社会に知らせて担い手を募る、開発したさまざまなボランティアプログラムを呼びかけて参加を募る、あるいは活動しているボランティアにボランティア活動に関する必要な情報を提供するといった働きである。VCoが出会ったさまざまな課題から問題点を見出し（気づき）、関係者に提言（ソーシャルアクション）していくなどの動きを創り出すための機能でもある。

この知らせる（情報提供機能）が、多くの人々をボランティアの世界に出会うきっかけを担っている。これらを他の関係する団体や機関等の連携による効果的な提供が求められる。

◎学ぶ（学習・養成機能）

ボランティア活動を希望する人たちに、活動に必要な専門知識や技能などの習得機会を企画開催し、ボランティア活動の質的向上を図る、あるいは広く一般市民、子どもたち等が気軽に参加できる体験プログラムの開発や学習機会を企画・開催する機能である。

この機能は、さまざまな課題から問題点を見出し、具体的なプログラムの企画実践で参加者の気づきを生

み、さまざまな活動への参加や動きを創り出していく機能でもある。

◎支える（相談援助機能）

要援護者やボランティアの想いを支持支援していく、要援護者の暮らしを支えていく、両者を励ましてその関係がより良いものに高まっていくように支えていく、あるいはボランティアの不安、悩み等を支えていく、ボランティア活動を通した喜びや感動を共に分かち合っていく、要援護者をその抱える生活課題の解決に向けて支え育てる（変える）、ときには適切な助言をしていく等々の活動を円滑に継続し、発展への援助促進といったことへの相談援助機能である。VCoの資質、人間性が問われる重要な機能である。

◎調べる（調査・研究機能）

要援護者（側）のさまざまな状況を調べ、その想いや実態をしっかりと把握する機能である。さまざまな制度や社会資源、ボランティアグループ、地域の団体、学校、企業や労働組合、広報機関等の社会資源や地域の人々を把握し、それらとのつながりを保つ機能であり、実践を科学していく上で大きな効果を発揮する機能である。

気づきとファシリテーション（援助促進）

ボランティアコーディネーションは、「人として生きる」ための気づきとファシリテーション（援助促進する）といった機能で包括されている。この $\alpha \cdot \beta$ から成る機能の主体はコーディネーション機能を担う者であるから、その主体が地域の課題に「気づき」、或いは地域の人々が地域の課題として気にしていることに気づくということである。この「気づき」によって、ボランティアコーディネーション5つの機能が活かされる。

また、「ファシリテーション（援助促進する）」は、課題解決に向けて「援助促進する」ために①つなぐ②知らせる③学ぶ④支える⑤調べる機能を実行へと移すために潜在している基盤であり、機能の実践的基盤と言い換えることができる。個人やグループを対象に、「気づき」や成長（変化）に関わりファシリテーション（援助促進）していくのである。

現代の子どもたちは、絶えず成果が求められ、心の問題を抱えている。子どもたちをそれらから解放するためにも、その生きる力を引き出す「ファシリテーション（援助促進する）」が重要である。

コーディネーションの担い手の広がり

我が国では1990年代以降から、福祉コミュニティの実現を目指して地域福祉の推進がその中心課題となり、より小地域における住民のボランティアな活動のコーディネーションが注目視されるようになってきている。

2000年6月に施行された社会福祉法第4条に「地域福祉の推進」が目的として掲げられ、その実現に向けて各自治体が策定する地域福祉計画において、小中学校区単位での新たな担い手の配置を地域福祉コーディネーターや地域活動コーディネーターといった名称での配置（提言）されているものが多い。さらに、地域福祉推進の担い手として期待される民生委員、小地域活動のリーダー、ボランティア活動のリーダー等、有給職員以外にもコーディネーションを担うことが期待される層は広がっている。また、文部科学省と厚生労働省の連携によって創設（2007年4月）された「放課後子どもプラン推進事業」では、子どもたちが心豊かで健やかに生まれ育つ地域社会の環境づくりをする事業の総合的な調整役としてのコーディネーターを小中学校区ごとに配置することによって、さまざまな分野で子どもの育成に関して特色ある活動を行う団体との連携などによって実施するとされ、その後の動向が注目されている。

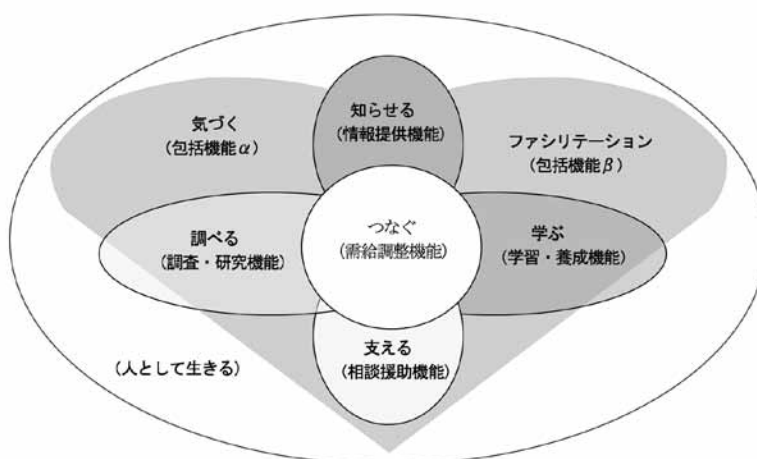
加えて、機関・団体としても、コーディネーション機能が必要とされる領域も広がっている（たとえば、阪神淡路大震災以降、「市民参加の重要性」が再認識され、博物館（美術館、動物園、水族館）、文化・芸術センター、スポーツ施設、病院、学校などさまざま

な分野でのボランティアの受け入れ）。さらに、行政の多様な活動場面（案内窓口、イベント、計画策定など）にも、市民社会構築のために「行政とNPO（あるいは市民）との協働」が重視され、協働のための機能としてのコーディネーションの必要性和担い手が広がっている。

子どもと居場所のコーディネーション

子どもの居場所づくりは、子どもの健全育成を推進する。写真は、北海道士幌町の『ダンボール迷路』と完成を喜ぶ子どもたちである。誕生して10年を迎えたこの『ダンボール迷路』は、子どもたちが、お互いの疲労を励まし合いながら、時間をかけて計画・造作する。そして、迷路で楽しむ人々の姿から喜びや達成感を体験し、数時間かけて汗を流しながら撤去する。活動の主体は、あくまでも公募による子どもたちだが、VCoとボランティアがこの取り組みを支えている。この約2500個の『ダンボール迷路』は、地域の子ども、大人（支援者）、企業の協働実践として話題になり、『ふれあい広場』という大人のイベントを、地域の子ども祭りに変貌させた。

子どもたちの「居場所づくり」は、子どもの健全育成事業や児童館、学童保育など行政施策の一環として行われている施設・機能の確保や、NPOや地域住民の運動として取り組んでいる空間・機会の確保などの活動である。特に後者の取り組みは、その活動分野や規模もさまざまであり、活動の中心的テーマも地域の居場所といった考え方からまちづくり、環境、不登校など今日的な課題にも対応しながら全国各地でそれぞ



図表1：ボランティアコーディネーションの機能 巡 静一（1998）一部加筆

れ展開されているボランティア活動である。ボランティア活動は「人」が想いを持ち行う行為であり、それを支援する働きのコーディネーションも「人」が行う行為である。これらは、子どもが人間として成長していく上で大切なこと、つまり、自らの意志で自分が価値を置く何かを実現させるために、さまざまな機会やリソースを必要に応じて取り出せる「引き出し」を確保できるかどうかが課題となっている（船木 2007）。門脇（1999）は『子どものための地域づくり』の目指すところは、地域の中での人的交流の機会をつくり、その内容を豊かにすることであると述べているが、その具体的な技術には言及していない。門脇が指摘する内容とは、その「引き出し」のことであり、子どもたちの社会力を高めるために地域に住む多数の住民を動員して多様な地域活動を展開し、そこに子どもたちを巻き込み大人たちとの交流を盛んにすることである。よい方向に地域（社会）を変化に導く技術が、コーディネーションであり、今後が期待されている。

子どもと地域のコーディネーションは、子どもを健全な環境である地域に導き、子どもと地域（社会）を健全化へと導く技術（アート）としてさらに注目されるであろう。

<参考文献>

- 田澤薫,『児童の養育責任の系譜に関する研究—少子化の根本原因を探る—』,厚生科学研究費補助金総合的プロジェクト研究分野子ども家庭総合研究事業（主任研究者 田澤薫 国際医療福祉大学）, 1999
- Rothman J. and J. Tropman. Three models of community organization and macro practice perspective: their mixing and phasing. In F. M. Cox et al. (eds), Strategies of Community Organization (3rd ed). Itasca, Illinois: F. E. Peacock Publishers, 1987
- 筒井のり子,『コーディネーション』,京極高宣監修『現代福祉用語レキシコン<第二版>』,雄山閣出版, p185, 1998
- Bronfenbrenner U. The ecology of human development, Harvard University Press. (磯谷芳郎、福富護訳『人間発達の生態学 発達心理学への挑戦』川島書店, 1996), p87, 1979
- 山本浩史,『組織におけるボランティアコーディネーターの位置付けとその課題 病院・高齢者施設を中心に』,日本ボランティアコーディネーター協会編『ボランティアコーディネーター白書 2005・2006 年版』,大阪ボランティア協会, p28, 2006
- 筒井のり子,『ボランティアコーディネーターの専門性認定をめぐる課題』,日本ボランティアコーディネーター協会編『ボランティアコーディネーター白書 2005・2006 年版』,大阪ボランティア協会, p18-23, 2006。また、筒井のり子,『ボランティアコーディネーター—その理論と実際—』,大阪ボランティア協会, p12-13, 1990、吾妻ふみ子、巡静一編著『基礎から学ぶボランティア理論と実際』,中央法規, p166, 1997 などでも同様の指摘がなされている。
- 志藤修史,『社会福祉協議会におけるボランティアコーディネーション』p52, 2006、桑原英文,『災害におけるボランティアコーディネーション』, p94, 2006、日本ボランティアコーディネーター協会編,『ボランティアコーディネーター白書 2005・2006 年版』,大阪ボランティア協会, 2006
- 巡 静一,『実践ボランティアコーディネーター』,中央法規出版, p12-17, 1998
- 船木幸弘,『子どもの健全育成とコーディネーション』,路上社, p41-2, 2007
- 門脇厚司,『子どもの社会力』,岩波書店, 1999

